

## 6 終わりに

今から2年程前に、ある広報係から依頼されて実際に体験したことを次のように書いた。

あれは、もう、今から十年ほど前のことになろう。  
その日も無事に終わって校舎の最終巡視を始め、二階に行くと、一つの教室だけ明るく電燈がついている。  
「あれ、消し忘れたかな。」と思って、その教室に入ると、担任のS先生が紙粘土をいじっている。  
「遅くまで大変だね。何がんばってるの。」と覗き込むと、「あす、子供たちが自分の作品に色づけするのですが、よく見ると、細かい所がよくできていなかったり、乾いてはがれてきたりしているの。…」と言いながら、紙粘土のかわいい動物をひとつひとつ手に取

って補修している。「子どもたちが時間をかけて一生懸命作ったけど、足の付け根などうまくできていないものが案外多いんです。色付けしたくなくなったり、こわれちゃって家に持ち帰りがなくなったりするのはかわいそうなので、きょうのうちにやっておこうと思ってー。」と、彼が言う。  
事実、糸でしかつと縛ることができず足がぐらぐらしているもの、構図は大担だが、細かい所には手が届いていないもの、これら四年生の作品かと思うほど、器用に作り上げられているもの、思うようにいかななくて投げやりなできばえになっているもの。ひとつひとつの作品が持つ表情は、本当に様ざままで、

それぞれがこのクラスの子供たちの顔に見える。間もなく八時を過ぎようという二月の寒い教室で、S先生は、夢中で指を動かしている。S先生のこの姿、あの言葉。これが、このクラスの一人一人の子供がいつも明るく楽しく学び、伸び伸び生活している源なのだと思打たれ、熱くなった。  
子供は、か弱い存在である。だから、苦しみ、もがいている子供ほど、先生が自分のことを本当に心配し、支えてくれていることを敏感に受け取め、先生を信頼し、だじな人と思うようになる。子供は、そこに、その先生の真のやさしさ、あたたかさを感じ取っているのである。

「教育は、人なり。」と言われている。人、それは、教師の心（マインド）なのではないか。S先生のこの心が、子どもたちにとって楽しい授業をつくり、学ぶ喜びを育て、ごく自然にクラス全員の確かな学力の育成にもつながっていたことを改めて思う。



「物豊かにして、心貧しい」と言われ始めて久しい。この状況は必ずしも子どもたちの世界だけでなく、保護者や教師にも当てはまると考える。その意味で、これからの学校経営において重視していかなければならない問題の1つに、教師の心（マインド）の育成があるように思う。

小・中・高等学校のそれぞれの教員が、今以上に子どもに寄り添い、授業の改善に取り組む努力を重ねてはじめて、「新しい学力観に立った学習指導」、「基礎学力の向上」、さらにはなかなか減少しない不登校やいじめ問題の解決に近づくことができるのではないかと学校経営部は今、考えている。